

子どもと唱歌・童謡の関わりについて

——唱歌・童謡の歴史と背景とともに——

東島 佳子

1 はじめに

歌うこととは何か。繁下（2001）は、「言葉を旋律とリズムに乗せてその意味を強調して訴えるのが歌うこと。そして訴えている人の歌に共感して打ち合う人がある。これが歌うということの実際の姿であり歌うという行為が、コミュニケーションそのものであることをその語源が示しております。」⁽¹⁾と述べている。生まれてすぐの赤ちゃんを母親は泣き声で機嫌を伺う。そして幼児の言葉の出発点となる「喃語」に対して、母が子どもの声の高さに合わせて返事をする。これが親子の最初のコミュニケーションであり、歌の始まりである。母親の優しくあやすような独特な口調は、まるでわらべ歌を聴いているようだ。ここからすぐに曲を歌うことはできないが、母の子守歌や童謡を聴き、少しずつ口ずさみ真似して歌うようになる。その成長過程で大事な存在なのが童謡・唱歌である。

歌が大好きだった私は、童謡・唱歌に触れる機会は多々あった。しかし、それはごく一部の話であり、今や童謡・唱歌が一番歌われるはずの家庭や幼稚園、保育園などでは歌われる機会はかなり減っているのが現実である。子どもに関わる大人が、童謡・唱歌を聴いたり歌ったりする環境にいなかったり、知らずに育ってきたということも、影響しているだろう。私は歌の活動として施設等での訪問コンサートに行くことがある。その対象は未就園児や高齢者であるが、その共通点は童謡や唱歌を含むプログラムが好まれるということである。それはなぜか。人生初めて関わる音楽が童謡という子どもは少なくない。上（2005）は、「幼少期に聴きまたうたった〈歌〉ほど、誰の記憶にも残り、ただに記憶に残っているばかりでなく胸の奥底に沈み積って人間感情の基層を成し、その人の生き方や美意識に影響をおよぼすものはないだろう。そういう意味で、子ども時代に歌い馴染んだ〈歌〉は、幼少期が〈人生の原点〉であるように、〈人間の心のふるさと〉なのである。」⁽²⁾と述べている。この幼い頃聴いて歌った童謡・唱歌〈人生の原点〉が、長い年月を経ても、記憶が定かでなくとも、幼少期を懐かしむ心情と思い出される風景であり、〈人間の心のふるさと〉なのであろう。その〈人生の原点〉であり〈人生の心のふるさと〉となる童謡・唱歌を歴史や背景とともに教材研究し、幼児期に特に触れる童謡を中心に、子どもと童謡の関わりや童謡・唱歌の重要性について考察する。

2 童謡と唱歌の定義

唱歌とは、元来が初等義務教育における〈教材〉として作られたもの、子どもに音楽的な感情

を養うとともに、その域を超えて徳育と知育の役割を大きく背負わされたもの⁽³⁾。いわゆる「文部省唱歌」である。

文部省唱歌とは、明治43年の「尋常小学読本唱歌」から昭和19年の「高等科音楽」までの教科書に掲載された楽曲のことである。

童謡とは、文学者が自己の〈詩心〉と内抱する〈童心〉との統一的表現をめざして書いた子ども向きの詩に、西洋音楽に立つ音楽家が曲をほどこして成ったもの⁽⁴⁾。

3 唱歌の歴史と背景、教材研究

唱歌の歴史は、日本の近代化とともに訪れた西洋音楽の受容から始まる。

1872（明治5）年に明治政府はわが国で最初の近代的な学生制度である「学制」を發布した。この「学制」のなかで、小学校に割り振られた授業科目も一つが「唱歌」である。現代でいう「音楽」に近いものと考えてよいだろう。しかし、明治維新からまもないこの時期、科目としての教員・教材ともに十分ではなく、国民的レベルの音楽教育はまだなかったため、「当分之ヲ欠ク」という但し書きがつけられており、すぐには実施されない科目として位置づけられていた。

その9年後、1881（明治14）年、音楽取調掛（現東京芸術大学音楽学部）編著として『小学唱歌集』初編が出版された。我が国で最初の音楽教科書である。最初の曲は外国の曲に日本の歌詞をつけた「ちょうちょ」「蛍の光」などがある。この初編に続き、音楽取調掛は82年に『第二編』、83年に『第三編』を続けて発表する。

1887（明治20）年「お正月」などが載った、子どもに分かりやすい口語体の歌詞で書かれた日本最初の楽譜付きの『幼稚園唱歌集』が出版されたのをはじめとして、1901（明治34年）「荒城の月」を含む『中学唱歌』が発行された。

しかし、1902（明治35）年、教科書の販売競争にからんで政治家・視学官・師範学校長・中小学校長などを巻き込んでの贈収賄事件が起り、その後、すべての教科書は文部省の編纂による〈固定〉となった。

その後、唱歌教科書の模範を作る目的として1910（明治43）年、「春が来た」「紅葉」「虫のこえ」「われは海の子」など27曲を取めた『尋常小学読本唱歌』を編纂。書名が「読本唱歌」となっているのは、歌詞がすべて『国語読本』に掲載されていたからで、日本語の歌詞が作られてからそれに新しく日本人の作曲家が曲をつけるというものであった。

1911（明治44）年から1915（大正4）年、小学校の学年別に「かたつむり」「ゆき」「村祭り」「故郷」などを取めた『尋常小学唱歌』が発行された。

以後、これを改訂するかたちで、

1932（昭和7）年、『新訂 尋常小学唱歌』

1941（昭和16）年、「国民学校音楽教科書」として『ウタノホン』上下

1942（昭和17）年から1943（昭和18）年、『初等科音楽』が発行。

これらの〈固定〉の音楽教科書に載っていた唱歌を〈文部省唱歌〉と呼ぶ。

唱歌代表曲（唱歌の歴史と背景で取り上げた曲）

『小学唱歌集 初編』

「ちょうちょ」明治14年11月

歌詞の原型が、愛知県尾張地方のわらべ歌から採集された。日本人にも親しみやすいメロディとしてスペイン民謡を元とした「Lightly Row（軽やかに漕げ）」という英語の曲に歌詞をつけたものである。その後、二番の歌詞に「すずめ」また「とんぼ」「つばめ」と四番まで春夏秋冬が揃ったが、これは長続きせず、戦後には一番だけが「1ねんせいのおんがく」に掲載された。

「螢の光」明治14年11月

長年日本では卒業式や別れの曲として歌われてきたが、元来はスコットランドの民謡曲に日本の歌詞をつけてできたものである。古語を使い故事を踏まえて書かれているので、理解が難しい。冒頭の「ほたるのひかり、まどのゆき」は〈螢雪の功〉といわれる、（灯す油が買えず、螢の光で勉強していた。また夜には窓の外に積った雪に反射する月の光で勉強していた）という、一途に学問に励むことを褒めたたえる中国の故事が由来である。

『幼稚園唱歌集』

「お正月」明治34年7月

当時は作詞・作曲者の名前を明記することはなかったため、作詞者が東くめ・作曲者は滝廉太郎であることが明らかになるのは、唱歌集が発行されて60年近く経ってからである。明治期の子どもの歌といえば、古語をまじえた文語体歌ばかりで子どもたちには難しく歌いづらかった。このような時代背景の中、東京女子高等師範学校（現お茶の水女子大学）の教授で、付属幼稚園の批評掛という職も兼務していた東基吉（東くめの夫）が、「幼い子どもに難しい歌を教える意味があるのだろうか」と疑問を持ったことが発端で、優しい口語体の歌が生まれた。日本で初めての話し言葉の歌である。〈四・七抜き音階〉で、子どもにとって作詞・作曲とも単純で分かりやすく、歌いやすい、近代音楽の唱歌の代表作といえる。

『中学唱歌』

「荒城の月」明治34年3月

作詞者土井晩翠が、中学唱歌用の歌詞を委嘱され、「荒城の月」を作詞、それに応募した作曲家滝廉太郎の作品が選ばれた。滝がドイツへ留学する1年前である。この時、応募作品数1人3曲までという条件があったため、滝は「荒城の月」「箱根八里」「豊太閤」に曲をつけ、すべて採用されている。この歌は、音階の第七音が使われていない四・七抜き短音階に近いもので、もともとロ短調の曲だが、今日歌われている「荒城の月」は1918（大正7）年に山田耕筰が編曲した二短調のものの方が多い。「荒城」がどこの城社をモデルにしているかについては、さまざまな説が入り乱れ、歌碑は、なんと全国4か所にある。作詞者土井晩翠は、福井県会津若松市の鶴ヶ城を思い描いたといわれている。

『尋常小学読本唱歌』

「春が来た」明治43年7月

文部省が直接に編纂した最初の「唱歌集」が、この「春が来た」を含む『尋常小学読本唱歌』である。小学校6年間で、たった27曲だった文部省唱歌。長く作者不明であったが、戦後になって作詞高野辰之、作曲岡野貞一と判明。このコンビネーションで作られた作品には「紅葉」「春の小川」「おぼろ月夜」などがある。作曲の岡野は、若き日に宣教師によって鳥取から上京。教会のオルガン奏者としての活動も生涯にわたって続けた人で、このメロディには「讚美歌」の影響もあると言われている。

「虫のこえ」明治43年7月

小学三年生になったら虫の名と鳴き声を知っているべきだとの教育的配慮から作られた歌で、いわば実用的唱歌である。しかし虫の名前は、時代とともに変わっていった。一番初めに鳴きはじめるマツムシやスズムシには問題はなかったが、二番の冒頭は「きりきりきりきり キリギリス」であった。『新訂 尋常小学唱歌』で「きりきりきりきり コオロギや」に変えられた。これは「キリギリス」という古名を現代の名「コオロギ」に直したのである。

「われは海の子」明治43年

文部省唱歌であり、長い間作詞作曲者不明であったが、平成元年になり、児童文学者で翻訳家の宮原晃一郎が作詞者であることが判明した。また『尋常小学唱歌』に登場してから、『新訂尋常小学唱歌』、『国民学校初等科音楽』とずっと採用されていたが、戦後期には、歌の持つ内容が軍国主義的であるとして、昭和22年に初めて教科書からはずされた。しかし昭和33年、文部省によって教科書に復活する。

「紅葉」明治44年6月

文部省唱歌作成で名コンビと言われている高野辰之と岡野貞一によるもの。

第二学年用に発表され、昭和16年『ウタノホン』で姿を消すが、昭和26年から小学三年生もしくは小学四年生の音楽の教科書に採用され、幅広く小学校で歌われている。高野はこの詩を信越本線〈熊野平駅〉あたりの山々をイメージして書いたといわれている。

『尋常小学唱歌』

「かたつむり」明治44年5月

第一学年用に発表され、この歌も昭和16年『ウタノホン』で姿を消すが、戦後に復活し、現在も教科書に採用が続いている。

一般的に呼ばれている〈かたつむり〉。学名では〈マイマイ〉と言うそうだが、この虫の本来の名は〈つぶら虫〉および〈まいまい虫〉であった。また現在では幼児語で〈デンデン虫〉というが、この曲では幼児語を取り入れたのではなく、むしろ、この唱歌が〈デンデン虫〉と定着させたようである。

「ゆき」明治44年6月

第二学年用に発表され、この歌もまた『ウタノホン』で一度姿を消し、昭和22年、『二年生の音楽』で復活している。

「雪やこんこ霰やこんこ」の歌詞は、伝承のわらべ歌を土台に作られている。「雪やこんこ」というのは「雪を来い来い」という意味である。雪が降って来るように呼びかけたものだという。雪は、子どもたちにとって、いつの時代にも楽しみで心おどるものであったようだ。また、雪の日に犬は元気に庭を駆け回り、猫はこたつにもぐりこむというイメージは、この曲によって定着した感は強い。

「村祭り」明治45年3月

「どんどん ひゃらら どんひゃらら」と笛や太鼓を擬音語で表現しており、祭りの臨場感を楽しく表している。また昭和17年『初等科音楽(1)』では、「おまつりび」の旋律が難しく、〈ソーラシレド〉から〈ソーソラレド〉と変えられた。

「故郷」大正3年6月

第六学年用に発表。児童ばかりか、青年や大人にも日本人の心の故郷として、幅広く歌い継がれており、唱歌の中でも圧倒的に人気を誇る名曲である。

長年作者不明であったが、戦後、この歌も作詞高野辰之、作曲岡野貞一と判明。彼ら二人は共に文部省小学唱歌教科書編纂委員で、数多く作品を残している。作詞者高野辰之が子どもの頃、故郷長野の中野市近辺では、集団での「うさぎ狩り」が行われており、「うさぎ追いし」はそこからきているといわれている。

4 童謡の歴史と背景、教材研究

大正7年、従来の教訓的で子どもの心情に沿わない唱歌に反論し、「子どもに分かりやすく子どもの生活に慣れ親しむ作品を」という夏目漱石門下の小説家、鈴木三重吉が主宰する児童用の童謡童話雑誌「赤い鳥」が創刊。これが童謡の始まりである。翌年発表された、成田為三作曲の「かなりや」が最初の童謡であり、この時代「金の船」(大正11年6月号より「金の星」と改題)「少女号」など、多くの児童文学雑誌が出版され、「七つの子」「赤とんぼ」「ゆりかごの歌」など、次々に童謡を生み出した。中でも、「赤い鳥」北原白秋と山田耕筰、「金の船」野口雨情と本居長世などが、現代まで歌い継がれている多くの童謡を生み出し、北原白秋・野口雨情・西条八十は童謡三大作家と呼ばれた。「この道」「しゃぼん玉」「肩たたき」などが彼らの作品である。しかし、この童謡運動は、当初、学校での唱歌教育に対する批判の活動だったため、学校教育の関係者や幼稚園にはあまり受け入れられなかった。

また今日では童謡と言えば節のついた〈歌〉であるのが常識だが、最初期の童謡に旋律がつけられてなかったのかを、「赤い鳥」通信欄より北原白秋は自身の理想とする童謡像で説明している。

無論童謡は歌ふ謡でなければなりません。尤も謡うと言つても唱歌のやうに作曲された上で謡うといふのではなく子供心の自然な発露から、とりどりに自由に謡ひ出すという風なのが本当でせう。それは極めて単純な節廻しです。

どうしても童謡は作曲しないで、子供達の自由な歌ひ方にまかせてしまつた方が、むしろ、本当ではないかとも思はれます。⁽⁵⁾

最初期の童謡は子どもたちにとって、自由に節付けられるものであった。しかし、楽譜を求める読者からの要望が繰り返され寄せられるようになり、「赤い鳥」創刊から10か月後となる1919（大正8）年、成田為三作曲「かなりや」の楽譜を初めて掲載した。しかし、当時は印刷自体が難しく、また楽譜を実際に読み解いて演奏できる人が少なかったため、すべてが歌になったわけではない。

大正期が終わって昭和期に入ると童謡は大きな変転を迎える。日中戦争から太平洋戦争へと戦火の拡大された時代、童謡詩人および童謡作家たちは、「かもめの水兵さん」などの〈軍歌〉の道を避けられなかった。1945（昭和20）年、敗戦後、童謡解放されたものの、その頃から、レコードやラジオが普及し、次第に歌い奏でる歌から、聴かれるサウンドへと変化していく。人々は、童謡を目よりもむしろ耳で捉えるようになったのだ。それは、それまで他人から口伝てに教わったりして、おぼろげな記憶にあった大正時代の童謡を、正しくはっきりおぼえて歌うようになった。童謡を取り巻く社会状況は明らかに変化し、それまで童謡文化を支えていた雑誌が休刊・終刊をむかえる。1929（昭和4）年「赤い鳥」「金の星」が刊行をストップ。いったん復活するが、鈴木三重吉の死により、1936（昭和11）年終刊となった。

1949（昭和24）年ラジオ番組『うたのおぼさん』（大人が子どもに歌って聴かせる）が始まり、一流の作詞・作曲家によって名曲が生まれた。作詞にはサトウハチロー、小林純一、佐藤義美、まどみちおなど。作曲には中田喜直、芥川也寸志、團伊玖磨などクラシックの一流のメンバーが起用され「かわいいかくれんぼ」「ぞうさん」「めだかの学校」などが流れるようになる。戦後の童謡創作活動で欠かせないのは「ろばの会」である。昭和30年創設で、平成12年まで存在していた作曲家5人の童謡作曲の研究グループである。メンバーは、磯部俣、宇賀神光利、大中恩、中田一次、中田喜直。ろばの会は、現実の子どもの気持ちに迫り、芸術的な児童歌曲〈新しい子どもの歌〉の創作をめざした。そして戦前期とはまるで違う前向きなメロディやリズムの童謡作品「サっちゃん」「ちいさい秋見つけた」など次々と生み出した。この頃から、〈子どものために作られた歌〉が「童謡」と言われるようになっていく。

上（2005）は、「最大の大衆的文化メディアはラジオであり、しばらく経ってからはテレビであり、音楽としての歌曲という性質からしてそれらに依拠せざるをえない（略）いわゆるコマーシャルやアニメーション作品のテーマソングなどに雪崩れてゆくほかはなかった。」⁽⁶⁾と述べているように、徐々に童謡はマスメディアに押されてゆく。そのなかで、かろうじて芸術的・文化的な水準を保つことができたのが、幼児対象の〈幼児童謡〉である。

「幼児童謡とは、童謡の中で、幼い子どもにうたわれることを特に意識・配慮して作られたもの。（略）生活世界は家庭・近隣・幼稚園（保育園）くらいに限られ、知識も生活体験も乏しい

幼児のための歌であるため、主題＝内容は、幼児の認識の裡にあるもの、父母、兄弟、友だち・遊び＝おもちゃ・動物・乗り物などが多くならざるを得ない。そして表現は、漢語などを用いず日常的でわかりやすい言葉を主要とし、旋律もまた単純で歌いやすいものであることが必要とされる。⁽⁷⁾

戦前まで道徳的な目的が強かった音楽教育も、徐々に芸術教育と生まれ変わっていく。そして童謡に対するイメージがその誕生から50年を経た1960年代末頃から、すこしずつ〈古い歌〉へと変容を始めるのである。

童謡の代表作品（童謡の歴史・背景で取り上げた曲）

「かなりや」大正7年11月「赤い鳥」に詩を發表、翌年5月「赤い鳥曲譜集その一」に曲を發表
作詞：西条八十 作曲：成田為三

歴史上、初めての童謡。大正7年11月「赤い鳥」に詩を發表。のちに曲をつけて翌年には赤い鳥初のレコードが販売された。この詩の発想は大正期の飼い鳥ブームであった。また哀愁漂う歌詞は自らの当時の生活や心情をベースに生まれたものである。

「七つの子」大正10年7月「金の船」に詩・曲同時に發表

作詞：野口雨情 作曲：本居長世

この歌の「七つ」とは「七歳」なのか「七羽」なのかと論じられたが、「七歳」または「七歳のカラス」という結論になったようだ。この歌の歌詞は、明治40年（童謡誕生の14年前）に書かれた短詩が原型。長世作曲のうちでも最も広く歌われたものであるが、映画「二十四の瞳」1954（昭和29）年の中で歌われて再ブレイク、知らない人はいない童謡となった。

「赤とんぼ」大正10年8月「樅の実」に詩を發表、昭和2年1月「童謡百曲集第二集」に曲を發表
作詞：三木露風 作曲：山田耕筰

露風がふと目に入った赤とんぼを見て、幼少期を思い出し書かれた歌詞である。昭和20年の音楽映画『ここに泉あり』のなかで歌われたことにより、いっそう親しまれる歌となった。抒情三味豊かなメロディが日本人の好まれたのだろう。メロディの「あかとんぼ」のアクセントがおかしいという意見があるが、大正期のアクセントはこの歌の通りだとおもわれると、竹内（2017）が「童謡・唱歌120の真実」で述べている。

「ゆりかごの歌」大正10年8月「小学女生」に詩を發表、翌年6月「赤い鳥曲譜集」に曲を發表
作詞：北原白秋 作曲：草川信

この詩には中山晋平も作曲しているが、草川曲のほうが広く親しまれている。歌詞の「ねんねこ ねんねこ」とは江戸時代のわらべ歌からきたもので、「寝よ寝よ」が優しく訛ってできたものである。子どもたちが歌う歌というより、母が歌って寝かせる日本の子守歌である。ラジオ放送で有名になった川田正子を育てた、児童合唱団〈音羽ゆりかごの会〉はこの「ゆりかごの歌」を会歌としており、会名もこの曲名から付けられている。

「この道」大正15年8月「赤い鳥」に詩を発表、昭和2年「童謡百曲集(三)」に曲を発表

作詞：北原白秋 作曲：山田耕筰

この詩について白秋は「北海道風景です。主人公は男の子です」と『白秋童謡読本 六巻』で述べている。白秋が北海道に一人旅行に行った時の印象を綴り、耕筰が母を慕う思い、懐かしい日々を偲んで作曲したといわれている。

「しゃぼん玉」大正11年11月「金の塔」に詩を発表、翌年1月「童謡小曲集(三)」に曲を発表

作詞：野口雨情 作曲：中山晋平

「うまれてすぐに、こわれて消えた」など孤独なもの、寂しいもの、儂いものに心を寄せる雨情文学が大きな特徴である。雨情が青年期に幼くして亡くなった娘の姿を「うまれてすぐに、こわれてきえた」と心情を重ねたともいわれているが、諸説あるようだ。戦後この曲が音楽教科書に掲載された際、歌い出しの「ソ（音名ト）」の音が子どもに低すぎるという理由で「しゃぼんだ……」までが同じ「ド（音名ハ）」の連続音に改正された。

「肩たたき」大正12年5月「幼年の友」に詩・曲同時に発表

作詞：西条八十 作曲：中山晋平

この西条・中山は「東京音頭」を作った名コンビである。この曲の内容は、日本家屋の縁側で子どもが母の肩を叩いている光景である。七音+五音で構成される一行の歌詞と、「タントントン タントントン」という擬音。この擬音部分に中山は、リズムカルに生かした旋律をつけ、幼い子どもに覚えやすくまた歌いやすくしている。

「かもめの水兵さん」昭和8年9月作詞その後すぐに作曲されたが、昭和12年5月レコード発売で発表

作詞：武内俊子 作曲：河村光陽

武内は叔父を見送りに行った際、横浜港のかもめの様子を見て、詩にしたためた。できた詩を知り合いの作曲家、河村に送りすぐに曲も出来上がったという。しかし、発表は少し後の昭和12年。レコードとして発売されベストセラーとなった。「かもめの水兵さん」を11歳で収録した河村俊子の娘、順子は、終戦後に海外へ出かけるたびに、訪れた国の言葉にしてこの歌を歌った影響で、様々な国の子どもたちにも歌われ、今では国境、人種を越えて国際親善に貢献しているという。また、渋谷二夫による振り付けで、運動会や学芸会などの演目にも採用された。

「かわいいかくれんぼ」昭和25年作詞作曲、26年放送発表、27年レコード発売

作詞：サトウハチロー 作曲：中田喜直

「うたのおばさん」の新作幼児童謡として、依頼を受け創作したサトウが作曲者の希望を聞かれ、中田を指名したという。子どものとき、誰もが遊んだかくれんぼ。その遊びの様子を小動物にたとえ、幼児に親しみやすく表現されている。作曲者の中田は、童謡作曲指南書であるその著『メロディの作り方』（1960年 音楽の友）においてこの歌は「言葉のアクセント（音の高低）」

とメロディの音の高低がピッタリ合っており、歌曲として「理想的な形」であり、「小さな子供でも無理なく歌える」とも記している⁽⁸⁾。

「ぞうさん」昭和27年12月 NHK ラジオで放送発表

作詞：まど・みちお 作曲：團伊玖磨

前年、まどみちおの詩に別の作曲家が曲を付けたが、曲が詩にふさわしくないと、新進作曲家の團伊玖磨に依頼が来て作曲する。その年、戦後で象がいなかった上野動物園にインド象インディアラが来日し、披露式のときに合唱で歌われたのがこの「ぞうさん」初演である。團はこの詩を初めて読んだとき、「抑揚があって、今にも幼児が歌いそうなイントネーションだと思いました。」⁽⁹⁾と述べている。

「めだかの学校」昭和26年3月 NHK ラジオで発表

作詞：茶木滋 作曲：中田喜直

昭和27年レコード化され、文部省芸能選奨をうける。この詩は、茶木の息子がめだかの群れを発見し、「ここはめだかの学校だ」と言った言葉をヒントとして書かれたという説が広く知られている。また、もともとの歌詞には繰り返しはなかったが、中田側から繰り返すこととしたようだ。人気番組「うたのおばさん」でも何度も歌われ、誰もが知っている歌となっていった。

「サっちゃん」昭和34年10月 NHK ラジオ「うたのおばさん」で発表

作詞：阪田寛夫 作曲：大中恩

作詞者阪田と作曲者大中は従兄弟どうしてある。「サっちゃん」の名は阪田が幼稚園の頃にしたさっちゃんという女の子の名前の響きが好きだった理由で、このタイトルをつけた。幼い女の子のことを男の子の話し言葉で書かれている。長田（2020）は、サっちゃんのかawaiiそうで、おかしくて、そして寂しい理由は「だけどちっちゃいから」なのです。作者の、この歌の主人公のサっちゃんに愛情をこめて見守っている様子がよく表現されている⁽¹⁰⁾。口言葉のリズムを生かして歌いやすく、子どもたちの間で広く歌われている理由がよくわかる。

「ドロップスの歌」昭和37年 NHK ラジオ「幼児の時間」で発表

作詞：まど・みちお 作曲：大中恩

NHKの「みんなのうた」や「おかあさんといっしょ」などで放送された。みんなが食べているドロップスを太古の昔の神様の涙に例えている。日本語の表現では、涙は「ぼろ ぼろ」流れるところを「ぼろん ぼろん」としたのが新鮮でリズムカル。その涙が「ドロップス」になったという発想がユニークである。

「ちいさい秋みつけた」昭和30年11月 NHK ラジオ第一「秋の祭典」で発表

作詞：サトウハチロー 作曲：中田喜直

NHK ラジオ「秋の祭典」で12人の作詞作曲家が依頼され、6曲の新曲を発表。その中の1曲

が「ちいさい秋みつけた」である。現在まで親しまれているのはこの曲だけ。昭和37年第三回日本レコード大賞童謡賞を受賞。サトウが住んでいた東京文京区の自宅の庭の「はげの木」が紅葉する情景が作詞のきっかけといわれている。また秋を謳歌するのではなく、「かすかな」や「わずかな」「ぼやけた」など、五感を震わせてほんの少し感じ取れる秋の表現から、確信ではなく、あいまいな感じが、人それぞれの感じ取り方が違い、風流である。

5 子どもと童謡の関わり

子どもが童謡を歌う時期は幼児期ごく一部でそう長くはない。子どもの興味は成長とともに広がり、アニメソングや家族が聴いている曲、マスメディアから流れてくる音楽へとどんどん新しく変化していく。井上（2018）は、「幼児期三歳までに「情緒」を育てることがもっとも重要であると、数学者の岡潔も「風蘭」などで述べているが、その時代に美しいメロディ、歌詞、言葉を知らず知らずに身につけることが如何に子どもの初期教育に必要なか、その情緒の育った上で本当の価値判断のできる子が育つ。そして三歳まで母親の力がまず童心を育て、父親を通じて四歳以降の躰を身につけ、憧れと理想を与えることが必要であると説く。そうした論を読むたびに、私は母親が子をあやす子守歌に始まり、童謡であれ、子どものうたであれ、また自身の愛唱歌であれ、何かにつけて親が口ずさむ歌声が、如何に子どもの情緒を育てるのに重要な時期であり、大切な素材である。」⁽¹¹⁾と述べているように、その短い間で触れる童謡の役割は、子どもにとって重要である。昔から伝わる文化・習慣、日本の四季の美しさ、動物など生き物の姿や動き、人間の感情など、童謡は言葉の宝であり、豊かに表現されている。また幼児期、子どもは大人のように複数の音を聴きとる能力が未熟である。そのため、童謡のシンプルで親しみやすいメロディは、歌詞のイメージを膨らませ、覚えやすい。童謡を子どもたちが歌うことは、豊かな知識を身につけ、五感を活用し、感性を育くむことにとっても重要である。

6 おわりに

上田（2017）は、「歌い継ぎ、歌い継がれる歌は、日々の生活で接する〈風景〉とその風景の中で育った〈生き様〉であり、その風景は〈いのち〉生かされた関係性をもつ場所である。そして、それらの体験した事柄を懐かしむ心情がうたわれたものである。」⁽¹²⁾と述べている。幼い時に触れる環境は、成長や発達、生き方に影響を与え、情操教育を養う上で大切なことである。

現在ではもう行われていない伝統や文化、遊びの歌詞が入った歌がある。しかし、その歌をきっかけに親から子へ昔の習慣を伝え、昔の遊びに触れる機会を作るのでもよいのではないだろうか。また、竹内（2017）も、「文語体の歌詞の持っている独特の力強さは、わかりやすい歌詞に変えてしまっては伝わらない。大人になってから、やっと、「うさぎ美味しい」ではなく「うさぎ追いついた」とわかってきてもかまわないのだ。ただ、(略)子どもの頃にはよく意味も分からないまま歌っていても、大人になってから、ふと思い出して口ずさみ、思わず涙してしまったという声をしばしば聞く。この曲にそうした思いを抱く人が、これから先も続いてくれることを

願う人は多いだろう。」⁽¹³⁾と述べている。昔のものや聞き慣れないものは難しいと考えすぎることはない。小さい時から何気なく歌うだけで、語彙力が身に付き、日本の伝統や文化などの生きた教養が身につくのである。

平澤（2018）は、「日本特有の音階やメロディに愛着が持てるようになるためには、それ以前の幼少期からこれらの音楽に親しみ、文化的な土壌を養うことが肝要である。」⁽¹⁴⁾と述べている。この意味でも幼少期に携わる教育者の役割は重要である。

教育者が、童謡・唱歌を指導する際には、伴奏の練習ばかりではなく、歌詞の意味、曲の特徴とともに、その時代背景なども理解し、十分な教材研究のもと、子どもたちと歌詞や風景のイメージを共有し、メロディとともに曲のイメージをさらに広げて、親しんで歌ってほしい。

童謡・唱歌は世界に誇る文化財産である。童謡・唱歌は、今もなお人々に愛され歌われている。また、この文化を支えようと活動する人々は多く存在する。世代も環境も大きく変化していく中で、長年、この世界を広げてきた人たちに続き、子ども文化への誇りをもって次の時代を育てて歌い継いでいく音楽教育の在り方は重要である。

引用・参考文献

- (1) 繁下和雄（2001）『幼児のうた130選』全国社会福祉協議会 まえがき
- (2) 上笙一郎（2005）『日本童謡辞典』東京堂出版 p. 1.
- (3) 同 p. 195.
- (4) 同 p. 195.
- (5) 井手口彰典（2018）『童謡の百年』筑摩書房 p. 051.
- (6) 上笙一郎（2005）『日本童謡辞典』p. 261.
- (7) 同 p. 418.
- (8) 同 p. 113.
- (9) 長田暁二（2020）『童謡名曲辞典』全音楽譜出版社 p. 340.
- (10) 同 p. 280.
- (11) 井上英二（2018）『童謡百年史 童謡歌手がいた時代』論創社
- (12) 上田豊（2017）「童謡・唱歌、子どもの歌を再考する—風景をキーワードに—」『吉備国際大学研究紀要』増刊号 p. 160.
- (13) 竹内喜久雄（2017）『唱歌・童謡120の真実』ヤマハミュージックメディア p. 66.
- (14) 平澤節子（2021）「童謡・唱歌を歌い継ぐための研究 昔話と昔話の唱歌に焦点を当てて」『名古屋女子大学紀要』第67号 p. 121.
- (15) 野ばら社編集部椎葉京一編（1998）『日本のうた 第1集 明治・大正』野ばら社
- (16) 新星出版社編集部編（2013）『童謡・唱歌・わらべうた』新星出版社
- (17) 服部公一（2015）『童謡はどこへ消えた 子どもたちの音楽手帖』平凡社
- (18) 長田暁二（2020）『童謡名曲辞典』
- (19) 小西行郎・小西薫・志村洋子（2017）『赤ちゃん学で理解する乳児の発達と保育第2巻運動・遊び・音楽』中央法規
- (20) 武藤憲夫（2008）「唱歌・童謡に関する一考察と教材研究」『富山短期大学紀要』第43巻(二) pp. 55-65.
- (21) 原祐子（2009）「保育における子どものうた」『四天王寺大学紀要』第47号 pp. 189-205.

（受理日 2023年1月4日）